
七月の河

六畳半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七月の河

【Nコード】

N6006E

【作者名】

六畳半

【あらすじ】

七夕小説企画『星に願いを』参加作品 奥手の主人公と病弱な女子高生が川辺で繰り広げる、10日間のラブストーリー

Scene・1（前書き）

この作品はフィクションです。実在の人物、団体とは関係ないほか、作中で登場する自治体や行事などすべて架空の物ですのであらかじめご了承ください。

Scene . 1

西に傾く太陽が、世界に淡いオレンジ色の陽光を投げかけている。次第に薄く、長くなる幾筋もの影が、東の空、広がり始めた夜の帳じょうりへと伸びていた。

吹く風にも、見える景色にも、梅雨時の湿つぽさは無く、真夏を想わせる熱気も有りはしない。世界は人々に安息をもたらすように、つかの間の清々すがすがしさに溢れていた。

東西に長い校舎の南側に、開けたグラウンドがある。下校時間が迫るこの時間になると、いくつかの運動部が用具を片付けて、帰り支度を始めていた。

そのグラウンドの北側、東西に真っ直ぐ伸びる100m走用コー스에数人の人影があつた。

スタートライン上にいる二人の男子は、手足を伸ばすように軽く跳びはねた後、おもむろに位置についた。二人の脇には、もう一人小柄な男子こがらがいて、ゴールライン脇にいる女子生徒となにやらアイコンタクトを取っている。

小柄な男子は、女子に向かって大きく一つ頷くと、スタートラインへ向き直った。

「位置について……。用意……」

その呟つぶやきに、すかさず二人は腰をあげる。今にも飛び出してしまいそうな程につま先に力を入れて、耳を可能な限りそば立てた。

準備が整ったことを確認した小柄な男子は、一際大きく息を吸い込むと、

「どん!!」

思い切り声を張り上げた。

犬崎市立第一高等学校は、犬崎市の西側、ただただ家屋が立ち並ぶ住宅地の中にある。

県内でも有数の生徒数と進学実績を誇り、開校当初から現在まで続く男子校としてその名が知られる高校は、生徒はもとより市民からも一高という愛称で親しまれている。

そんな一高も、ようやく学期末テストが終わり、三年生は受験に向けて本腰を入れ始め、一・二年生は運動部も文化部も夏の大会や展覧会のために最終調整に入っていた。

そんな中、男子陸上競技部も例に漏れず、夏休み初日から始まる地区予選へ向け、練習にも熱が入っていた。

50m付近まで並んでいた二人は、そこからじわじわと差がつき、ゴールから見て左側の男子が体一つ前に出ていた。

体一つの差は少しずつ広がり、二人は疲労に顔を歪めていく。落ちそうになるスピードを懸命に維持して、それでも落ちるスピードに焦りを感じずにはいられなかった。

近づくゴールラインに微かな望みをかけると、二人は最後のスパートをかけた。

結局二人は、前のめりに倒れるような形でゴールした。

「ハア……。ハア……。やっぱ……。短距離選手に……。勝とうつてのが無理な話か……。なあ修哉」

ああ向けに倒れ、ぜえぜえと息を吐きながら遅れてゴールした男子が言った。修哉と呼ばれた男子も、その脇で同じようにああ向けになり、盛んに息を喘いでいる。

「馬鹿言え、祐樹。負けたら負けたでまずいんだよ。レギュラーか

かってんだ」

修哉は肘をついて上体を起こした。祐樹は苦い笑いを浮かべて修哉を見る。

「それも……、そうだな」

そう言つて祐樹は立ち上がった。ゴール脇にいた女子　マナージャーに近寄つて、彼女の持つていたストップウォッチを覗いた。

「タイムは？」

「11.6と12.5だよ」

「そんなに差があんのか！？　約一秒じゃねえか……」

予想外の結果に祐樹は肩を落としてうなだれた。くやしそうに眉をひそめる。

「高校入りたての頃はそんなに変わらなかったのにな」

「まあ、朝倉君は短距離選手だからね、当たり前と言えば当たり前だよ」

「そうだけど……。おい修哉、聞いたか？」

祐樹は修哉を振り返った。しかし修哉は座ったまま、ぼんやりと遠くを見つめている。

「どうした……？」

物憂げな修哉の表情に祐樹は怪訝そうに聞いた。

「あ？　ああ……。聞いた聞いた、タイム落ちたわ」

「落ちたつて前何秒だよ、これ以上速かったら俺泣くぞ」

「盛大に泣いてろ、11.0だ」

「うそー！！　お前がそんな速いわけ」

「おい！！　テメーら何やってんだ！！　さっさと片付けて着替えるー！！」

祐樹の嘆声を遮つて聞こえたのは、陸上部の部長、三年生の怒声だった。

「やべ……。霧島先輩怒らしたらメンドイぞ、急げ修哉」

祐樹は駆け足で部室へと向かう。修哉もそれを追いかけて走り出した。

下校時刻を告げるドボルザークの『家路』^{いえじ}が、校舎屋上のスピーカーから流れ出した頃には、修哉と祐樹は校門を出て、燈野大橋^{とつの}へ向けて長い坂をのんびりと歩いていた。

「そついやあそろそろ燈野祭りだな」

祐樹が、電柱に張られた祭りの広告を見て言った。

「そつだな……」

「今年は誰と行こうかねー、去年は中学のやつらと行ったけど、一年もするとメールもしくくなるしなあ」

「陸上部で行かないのか？」

「駄目駄目。陸上部のメンツはノリが悪い。行っても面白くない」

「間違いないな。確かに面白くなさそうだ」

燈野祭りは、犬崎市を流れる燈野川で開催される七夕祭りの事で、毎年七月の第一土曜日と日曜日を使って全国から約50万人もの観光客が訪れる県内屈指の巨大イベントだ。祭りのメインイベントは灯籠流し^{とうろう}で、川面^{かわも}を埋め尽くす数万の灯籠が闇夜^{やみよ}に作り出す光と水の幻想は、見る者を感動させて止まない。これを見るためだけに祭りに来ても損はしない、小さい頃から祭りに参加している修哉はそう思っている。

修哉と祐樹は、燈野川に掛かる橋では最大の、燈野大橋へ差し掛かった。車道をひっきりなしに流れる車に少々嫌気が刺しながらも街の東側を目指す。

人口20万人を有する中都市犬崎は、住宅の立ち並ぶ西側と、繁華街として栄えている東側を、北から南へ流れる燈野川で大きく二分している。二人は東側のマンションに長く住んでおり、中学までは東側で育った。高校進学を機に西側へ行くことになったが、それほど大きい町でもないのが、新鮮味というのはあまり感じられな

った。

ただ、男子校ということもあって色恋沙汰いろこいざたなんて物は中学の時より一層減った。修哉にとつてはそんな男子校のリスクも、元々が女子に好かれる性格でも無いので気にならなかったが、自分の隣を歩くこの遊び人にとつては重大な事らしく、度々愚痴たひたひを聞かされていた。

そんな背景があるのか無いのか、燈野祭は一高生にとつて、恋愛を見付けるためにも成就じょうじゆさせるためにも、必ず通らなければならぬ、そして最も大きなポイントらしい。

「修哉ー、可愛い娘知らない？」

制服のポケットから携帯を取り出して、忙しくメールを打ち始めた祐樹が言った。

「俺が知ってると思うのか？」

「いやー、いつもはクールな朝倉君も裏では数多あまたの女性を掌てのひらで……」

「やめろやめろ、それ以上言うな」

祐樹の発言を遮る。祐樹はさも面白そうな笑みを浮かべた。

「あれ恥ずかしいの？」

「馬鹿言え」

「そうか恥ずかしいのかー」

「阿保言え」

「大丈夫だ、君ならきつと出来る」

「何が出来るんだ、川底に突き落とされたいか」

「ひどー、俺がカナヅチなの知ってるだろ？」

「いや、だから突き落とすんだろ？ 待ってる今ここで積年の恨みを晴らし、お前を藻屑もすくに……！！」

「ごめんなさーい、許してー」

二人の笑い声が夕暮れに響く。空に登る入道雲が、夕日を浴びてどこか淋さびしげに輝いていた。

二人は大橋を過ぎて、堤防を北上する。燈野川の堤防は上下二段に分けられていて、上段には自動車が往来する一般道がある。その

一つ内側の下段には遊歩道が設けられていた。

河川敷で汗を流す少年や、買い物帰りの親子、ジョギングする男性。なんでもない人々の営みが確かにそこには在って、二人もそれに溶け込んでいる。なんとなく幸せでなんとなく充足した時間。

「あれ……？　修哉、あそこにいる人って……」

不意に呟いた祐樹の視線を目で追う。すると、堤防の土手に体操座りで座る女子が見えた。

「……山田郁美いくみさん？」

「だよな……」

中学の時の同級生だった。長い黒髪を一つに束ねて右肩から下ろしているけれど、その後ろ姿に修哉は見覚えがあった。

「へえー、久しぶりだな。結構可愛くなっただじゃん」

「女子に会ったびにそういう目で見るな」

「すいませーん。でも本音だぞ」

「わかってるって」

それを聞いた祐樹は酷く驚いたように目を瞠みはった。相変わらずの喜怒哀楽の激しさで、修哉は内心でうんざりした。絡みづらいとはこの事を言うのかもしれない。

「わかってるだって……？　修哉さん……、あなた、もしかして女性に対して可愛いと思う感情があったんすか？！」

「ばっ！　俺を宇宙人か何かと思ってんのかお前は、一応これでも人の子だ」

「えー、イメージが……、崩壊だ」

「何で一言言っただけで崩壊するんだ」

そういう間にも、互いの距離は縮んでいく。話し掛けるべきかそうじゃないのか修哉が逡巡しゅんじゆんしていると、祐樹が先手を打って声を上げた。

「おーい、山田さーん」

周囲の人がその大声に振り向いた。修哉にしてみれば、これだけでも目を背けたくなるのだが、祐樹は気にもかけていない。祐樹の

その明けっあけびろ広げな性格に若干じゃっかんの羨望せんぼうを感じつつ、修哉は郁美を見た。
「……？」

当の郁美は不安げに周りをキョロキョロと見回している。やがて修哉達を見つけると、途端とたんに笑顔に変わった。

「あっ！ 朝倉君あさくらに渡辺君わたなべ！」

立ち上がった郁美は急ぎ足で近づいてくる。右手に赤いリードを持っていて、散歩に来ていたのだろうか、その先には仔犬が繋がれていた。

「久しぶりー。 毎日散歩で使ってるの？」
一年振りだと言うのに祐樹は臆おくさず話します。修哉には傍はたから見ていることしか出来なかった。

「うん。今日はちよつと部活が長引いたから、こんな時間かな、そういうば土日もちよつと早いな」

「へー、そつか、どうりで今まで気付かなかった訳だ……」

祐樹は納得したようにそう言つと、しゃがみ、リードに繋がれていた仔犬に寄り添つた。

「こいつ。名前なんていうの？」

「カムナ。去年から飼いだめたんだ。メスだよ」

「メスか、それにしても元気なやつだなー」

祐樹が体を撫で始めると、余程嬉しかったのか、カムナが飛び付いた。

「はははっ、やめろやめろ、舐めんなー！！」

それを見て、郁美が少しだけ笑つた。

脇で傍観している修哉は、なかなか話が切り出せなくて、祐樹を見ている郁美の横顔にチラチラと目を送っていた。整った面長の顔は、中学の時の清楚せいそさをそのままに、随分大人っぽくなっていた。修哉は言葉を選び続けて、二人の間には長い沈黙が流れている。堪らなくなつた修哉は視線を逸らしながらどうにか口を開いた。

「二高、だよな……」

郁美が聞いていてくれて良かった。そう思うほどに小さな声だつ

た。

「うん」

「どうだ？ 高校の雰囲気は」

「共学になってまだ日が浅いからね。女子ばっかで楽しいよ」

「そうか」

二高ニこうというのは、犬崎市立第二高校のことだ。三年前まで女子校だった二高は一高ほどでないにしろ進学校で、犬崎市の東側、周りを高層建築に囲まれた市街地にある。犬崎に二つだけある市立高校で、女子校だった経緯から、一高と一緒に恋人高こいびとなんて呼ぶ人もいる。

「朝倉くんはどう？」

「どうだろうな、まあ、あのうるさい奴がいるから退屈はしてないな」

郁美は軽く吹き出して破顔はがんした。華奢きしゃな肩が小刻みに揺れる。

「学校での光景が目には浮かぶよ。中学の頃から仲良かったもんね」

「まあ、腐れ縁くさって奴だ、時々なんでこいつと仲良いんだろうと思う」

当の祐樹は、顔やら手やらを舐められながら、カムナとじゃれあっている。人間を含めて基本的に生き物の好きな祐樹の事だ、相当楽しいのだろう。

「そうかなあ……。十分親友みたいに見える」

「うおっ！！ ちょい待ち！！ 落ちる落ちる！！」

郁美が言い切ろうとした所で、カムナが祐樹を前足で押し倒した。祐樹の頭が土手へ飛び出した。

「こら！！ カムナ止めなさい！！」

すかさず郁美がリードを引っ張った。リードが首に食い込んで、カムナが奇妙な声を上げる。

「ごめん。大丈夫？」

郁美が心配そうに祐樹へ声をかけた。

「大丈夫大丈夫、ちよっと倒れただけ」

制服に付いた砂埃すなぼこを払うと、祐樹は立ち上がった。携帯の時計を確認するとぐるりと周囲を見渡す。

気付けば太陽は地平線に沈みかけていた。東の空は一層暗くなり、うつすらと星がみえはじめている。

「そろそろ行くか、修哉」

「おう」

「じゃあね山田さん」

「うん。じゃあね」

荷物を持ち直して、祐樹は歩きだした。

「……それじゃあな」

「バイバイ」

修哉も祐樹を追い掛け歩きだす。二人が少し離れると、郁美も反対方向へカムナと一緒に歩きだした。

結局二人がマンションに帰ったのは陽も沈み切った8時前の事だった

「やつばまだ郁美の事好きなのか？」

マンションの階段を昇りながら、ふと祐樹が尋ねた。

「おいおい、えらく唐突だな。いつ俺がそんなこと言った？」

コンクリート張りの階段は、冷めた夜風さに当てられて、鍾乳洞しゅうにゅうどうの様に涼しかった。スニーカーが階段を叩く音だけが、不思議と大きく聞こえる。

「中学の時からバレバレだったぞ、修哉。ずっと超が付くほど奥手おくでだと思ってたのに。お前山田さんの前になると途端に顔が赤くなるもんな」

「……」

「まあ、何でも聞くぞ」

「ああ……じゃあな」

修哉より下の階に住む祐樹と踊り場で別れると、修哉はとぼとぼと階段を登り始めた。

こういう重い話になると、囃し立てずにしっかり話してくれるのは友人として誇れる部分だと修哉は思う。でも、それ故に辛かった。早く教えて欲しかったと言われている気がして。やっぱり、それだけ自分は頼りないのだろうか。手伝ってあげなければと思われてしまふのだろうか。

「ただいまー」

緑色の鉄扉を開けて中に入る。無意識に発した帰宅の挨拶には、重苦しいため息が混じっていた。

「お帰り、ご飯出来てるから冷めないうちに食べちゃいなよ」

キッチンから顔を出した母が言った。しかし覇気の無い修哉の顔を見て途端に閉口する。

「わかった。ちよつと荷物置いてくる」

言って、自分の部屋へ入る。ドアをきつく閉め、荷物を放り投げた。おそらく母に整えられただろうベッドへのそのそと近付いて、身をなげうつように倒れた。

泥になったように、体がベッドに沈み込むを感じた。疲労という疲労が下腹部から重力にしたがって抜け落ちていく。

数秒の間そうしていると、修哉はおもむろに寝返りをうった。

窓から夜風が流れている。遙か空の先には無数の星々が煌々と瞬いている。

中学の修学旅行で東京に行った時、ホテルの窓から眺めた夜空に、恐ろしいほど星がなくて拍子抜けした覚えがある。ここも田舎とは呼べないけれど、市の西側にはまだまだ多くの自然が残っていて、修哉も何度か天体観測にいったことがある。

ふと修哉は、中学の時三年間郁美と同じクラスだったことを思い出した。三年の時は祐樹とも同じで、修学旅行の東京散策でも一緒に行動していた。

意外に一緒にいることが多いのに、少しも近くなった気がしない。

二人の距離は燈野川の兩岸のように平行で、この思いは交えぬままだ。

もう一度、今度はしっかりと夜空を見上げた。一面の星空に、常のように一際明るい部分がある。一年に一度だけ、永遠の愛を誓った男女が、その激流を越えて会うことを許される。伝説の大河。

彼らはまた今年も巡り会うのだろう。そして人はその虚構きこうの物語に美しいだとか感動的だとか、ありきたりな形容を付け加えて、思いを馳はせるのだ。

結局虚構は虚構のままで、現実になりはしない。修哉は一つため息をつくとしち上がり、扉へと近寄った。薄明かりの中、修哉の背中では、闇に溶け込むほどに暗い影を落としていた。

Scene . 2

次の日、修哉は午前中に土曜練習を終えて、早々と家に帰った。簡単な昼食を取った後は何をするでもなくだらだと無為に午後を過ごす、五時にはジャージ姿で外に出た。

両親が共働きの朝倉家は、日中家に修哉以外の人間がいることはほとんどない。用心の為に鍵をかけて、扉の前でシューズを履くと、一目散に階段を駆け降りた。肌に纏わり付きジリジリとした空気が、やけに鬱陶しかった。

マンションを出て空を見上げると、そこには昨日と同じ大きな入道雲が浮かんでいた。朱く色付いた雲は、微妙に形を変えながら流れ、どこか悲しげに、周囲の夕空に輪郭が溶け込んでいる。

燈野川には昨日を超える多くの人の姿があった。

修哉は速度を緩めながら大橋の方へ走っていく。スポーツに精を出す人は少年から老人まで多様で、買い物帰りの婦人やちらほらと補修帰りの学生まで見える。

修哉は土手の斜面を、誰かを探すように注意して見ていった。すると、遊歩道から河川敷へ下りる階段に郁美を見つけた。今日は長い髪を束ねていなくて、そのまま下ろしている。側にはもちろん力ムナの姿も見える。

修哉は内心で安堵すると、近寄って声をかけようとした。そして、立ち止まった。

突然に、唐突に、言葉がでなくなった。額を冷や汗が流れ出す。何と言って呼べばいいだろう、何と言って会話を続けられればいいだろう。自分との会話ではきくと郁美は笑ってくれない。

芽生えた不安は、直ぐさま修哉の心を覆ってしまう。大きくなる

不安に、身震い^{みびる}がした。

結局自分は奥手だ。祐樹の様な人間が側にいなければ女性に話し掛けることすら出来ないのだ。

遠目で郁美を見るだけで、結局何も出来ていない、何も伝えようとしていない。なんて都合のいい、無責任な思いだろうか。郁美を思つて勇気を出す事もできないのだ。祐樹なら出さなくても良いような勇気でさえも。

自己嫌悪に苛^{さいな}んで、この場所からいなくなりたいと思つた。二人の間を埋める大きくて見えないこの距離を、修哉には飛び越えることが出来なかった。

修哉は前へ向き直り、駆け出そうと足に力を入れる。

そのときだった。

「朝倉君！」

唐突に自分を呼ぶ声に驚いて、修哉は後ろを振り返る。

「こつちこつちー」

そこには笑顔で修哉を呼ぶ郁美がいた。突然の出来事に状況が掴めない修哉は、どうしていいかわからず、呼ばれるままに郁美に近寄った。

「今日も会うなんて奇遇^{きぐつ}だね」

「あ…………、そうだな」

しどろもどろ話す修哉を気にもかけずに、郁美は笑顔を崩さなかった。リードに繋がれたカムナが、訝^{いぶか}しげに修哉の臭いを嗅^かいでいる。

「毎日ここで走ってるの？」

「…………ああ。土日だけだな、いつもはもうちょっと遅い」

「ふーん、そうなんだ。自主練だなんて偉いね」

「そうか？ 皆やつてたりしてるけど…………」

修哉は郁美の隣に少し距離を開けて座った。眼前^{がんぜん}に夕日に輝く燈野川の川面がある。

「そうなんだ…………、皆偉いなー。朝倉君はテニス部だよね？」

「ああ、それな。高校入ってから陸上だよ。テニス部入ろうとしてたけど、同好会みたいなレベルでさ、祐樹が嫌だ、ってな」

「そっか、昨日ラケット持ってなかったから、変だなーとは思ってたんだけど、そういう理由だったんだ」

目の前でカムナが尻尾を振りながら右往左往うへさうさうしていた。野球ボールが飛ぶたびにそれを追い掛けようとし、小さな子供の甲高い声かんだかに敏感に反応している。

修哉は二の句が継げなくて、必死に言葉を選んでいた。相手が喋ってくれば話すことが出来るのに、自分から話題を振ることが出来ない。

近づいて来たカムナを柔らかく撫でながら、修哉はようやく口を開いた。

「山田はしないのか？　そういう、運動とか」

「……うん。私体弱いんだ。小さい頃から喘息ぜんそくもちでさ、中学からずっと美術部です」

郁美は微笑む。純粹で悪意あくいを見出だせない、無垢むくな笑顔。

修哉は何てことを聞いてしまったんだろうと酷く後悔した。郁美が病弱だということは知らなかったけれど、何か体が弱いことで嫌な思い出があるのかも知れない、郁美の笑顔を見るとそんな気がしてならなかった。

「……ごめん、悪かった。そんなこと聞いてさ」

「え？　何で朝倉君が謝るの？」

郁美は怪訝な顔で修哉を見る。

何をやっているのだろっ、そう修哉は自分を侮蔑ぶへつした。自分が謝れば一層場が悪くなるのに、謝らなければならない状況を作りだしてしまっている。

そろそろ帰ってしまおうか。弱気な自分にはこのいたたまれない空気をやり切る自信がなかった。

ふと、南から勢いのある風が吹く。七月の温かい風は、川面を走り、土手を駆け登り、彼女の長い黒髪をさっと撫でる。

修哉の思考はそこまで止まった。

視線が郁美に固定されて、逸^そらすことが出来なかった。きらびやかに舞い踊る郁美の長髪は、どこまでも麗^{うつく}しくて、どこまでも輝いていて、そして美しかった。

心臓^{はやがね}が早鐘を打つ。恍惚^{こっけい}としてばやけた視界をどくん、どくんと打ち付けるように。

「カムナ、待つて！」

自失^{じしつ}した意識を押し戻したのは悲鳴にも似た郁美の叫び声だった。反射的に上を見上げると不安に顔を青ざめた郁美がいた。目を瞠^{みは}り、視線は怖^{おそ}れに凍り付いて、今にも泣き出しそうに表情を歪^{ゆが}めている。傍^{そば}にいるはずの仔犬の姿はなく、郁美の手に赤いリードだけが握られている。

カムナは、堤防の道を、風に流されるブルーの風船を追いかけ疾走していた。カムナの進む先には、車が激^{おつ}しく往来する燈野大橋^{あかり}がある。

郁美は鬼気迫^{ききせま}る状況に病弱な体を厭^{いと}うことなく、カムナを追い掛け始めた。

走る郁美。動かない修哉。遠ざかるカムナ。広がる互いの距離。流れ去る状況が修哉の心臓を思い切り叩いた。驚きや不安や焦燥^{しやうそう}や緊張が、激しい衝動^{しやうどう}となって心臓を突き上げる。

悔しかった。今まで幾度となく卑下^{ひげ}を繰り返してきた自分が。情けなかった。今、この状況を見逃^{ためら}そうとしていた自分が。

恐ろしかった。動き出すことに躊躇^{ためら}っている自分が居ることが。でも、今は思う。

郁美の為に悩む必要も、理由も、時間も、自分には無いんだと。

修哉は覚悟を決め、猛然^{もつぜん}と走り出す。

すぐさま郁美を追い越して、前を走る白い仔犬を遮しゃじむ二無二追い掛けた。

息を絶たやして立ち止まる郁美。河川敷で練習していた野球少年達。風船を手放してしまつた子供とその母親。彼らに見つめられながら、それを意に介さず、修哉はただただ走つた。

仮にも相手は人間より足の早い犬だ。かといって修哉に負ける気はない。進む足に、振るう腕に、渾身こんしんの力をかけ、カムナへと突き進む。

しかし、どれだけ走ろうともその差は縮まろうとしない。修哉は引き離されないようにするのがやっとで、距離を重ねればそれだけ疲労に速度が落ちていく。そんな修哉をよそに、無情にもブルーの風船は流れていく。

二人の距離はおよそ20m。大橋との交差点とは100mを切つている。カムナが交差点へ突つ込めば、間違いなく無傷では済まないだろう。助かるには風が止むか、カムナが止まるか、修哉が捕まえるか、三つに一つ。

しかし、50mを切つてしまつたこの距離では、風が止もうとさして意味は無いだろう。情力だりよくで風船は流れるだろうし、カムナが急に止まるとも考えにくい。もうすでにカムナの安全は修哉の足にかかつているのだ。

「……くそっ」

そう悪態あくたいをつくほどに、修哉は切羽詰せいはまつていた。100m以上を全力で走つた足に余力は無く、明らかに速度は落ちている。止まれ、止まれ。カムナに向かつてそう心の中で思えば思うほど最悪の結果が脳裏をよぎる。

修哉の視界に大橋を行き交う鉄塊てつかいの群れが映つた。今止まらなければ、自分も巻き込まれる事になる。あれだけ走り込み、あれだけ鍛えた足でさえ、一つの命を救うには足りないのだ。もちろん、そのために鍛えたわけではない、でも、今となつては、その努力さえも無意味な物に思えてくる。

もう駄目だ。そう諦めようとしたとき、

「カムナ!!!」

再び、今度はより大きな声で、背後から郁美の声が聞こえた。その声に反応してカムナが後ろを振り向いた。途端にスピードがガクンと落ちる。

今だ、と思った。今しかない、と思った。

修哉は最後の力を捻り出し、カムナへと飛び込んだ。

「本当にごめんなさい……!」

郁美は、大橋の手前で何度も何度も修哉に頭を下げていた。その腕に激しく息を吐くカムナを抱えている。舌を出したその顔は、あまり悪びれていないように見えた。

「もう大丈夫だから、そんな謝らないでくれ」

「でも……」

郁美は泣きそうな目で修哉を見る。それもそのはずで、修哉の着ていたシャツは無惨にも破れ、そこから覗く肌にはいくつか擦過傷が見えていた。

「大丈夫だって言ってるだろ？ シャツなんてまだたくさんあるし、部活なんかやってるとかすり傷なんて日常茶飯事だ」

修哉にとっては人生初のダイビングキャッチがあんなに上手く決まった事の方が重大だった。カムナを抱えて胴体から着地したときには、頭が一つ車道に出ていた。後数十センチ飛び込むのが遅かったら、修哉もカムナも擦過傷では済まない。

「そうだけど……、ごめんなさい!」

また郁美は頭を下げる。謝罪以外の言葉を知らないのかこの娘は。修哉はどうすればいいのかわからず、困惑顔で郁美を見ていた。

「お前が謝る事無いだろ、強いていうなら、悪いのはあの親子……あれ」

そう言つて修哉は辺りを探す。人の数はそれほど変わっていないが、風船を手放してしまつた親子の姿はどこにも見えない。

「まあ、とにかく郁美のせいじゃないんだから、そんな謝んな」

気付かずに郁美と呼んでいた事に、自分の事ながら驚いて、修哉は一層困惑した。

郁美は思案顔で下を向いていると、突然合点したように修哉を見上げた。

「そつだ！ 私の家に来て！」

「……は？」

修哉は郁美の言っている事の意図が掴めず、首を傾げた。

「いくつか出血している所もあるし、何にもせずに帰すのは嫌だから、家に寄つて行つて欲しいの」

修哉は無意識に周囲を見回した。郁美は今自分と喋ってるんだよな。そんな訳のわからない自問をしていた。相変わらず奥手だと思ふ。

「……いいよね？」

「……あ、ああ」

修哉が曖昧に同意すると、郁美の表情は幾分明るくなった。

「ありがとう！」

言つて、郁美はカムナを下ろす。今度はしっかりとリードを握っている。

「駄目な子なんだから、本当に……！」

郁美はカムナの頭を平手で軽く叩いた。そして立ち上がる。背の高い修哉を見上げると、微笑んだ。

「じゃ、行こつたか」

修哉は釈然としないまま、先を歩く郁美に着いていった。

郁美の家は、中学が同じだったのだから当然の話だが、修哉の家

から数分の近場にあつた。

しかし、修哉の様に集合住宅ではなく一戸建てで、庭も広い和式の家だつた。

「広い家だな……」

生まれてこの方一戸建てに住んだことの無い修哉は、広い家やしつかりした造りの建物に思わず感嘆かんとんを漏らした。

「この辺りの家は、殆どが何十年も前に建てられた家ばかりだから、家だけ大きいって所は多いよ。当時はここもかなりの田舎だったらしいし、土地は安かつたって」

郁美は門扉を開けて庭に入った。玄関までの十メートル程の道を、修哉を連れてゆつくりと進んでいく。

二人が玄関まで進むと、郁美はすぐ脇にある犬小屋の前でカムナのリードを外した。カムナは一つ身震いをして、皿に注がれた水を飲むと、勢いよく庭を駆け出す。

「どうぞ、上がって」

郁美は玄関の引き戸を開けて修哉を招き入れた。

「お邪魔します……」

畏まりながら玄関に入ると、木材独特の香りが修哉の鼻をくすぐった。風通しが良いのか、部屋の中には涼しい風が吹いている。

「その居間で待つて、消毒薬とか持つてくるよ」

修哉は玄関から上がって、すぐ左の部屋に入った。畳部屋で、部屋の隅に床の間とこのまがあり、その逆にはテレビが置いてある。部屋の中央には少し大きめちゃぶ台も置いてあつた。修哉はちゃぶ台の前であぐらをかくと、不慣れな場所だから周囲を見回す。

南側の窓からは広い庭が見えた。今は使われてない小さな池や、松や梅の木が植えられている。

「簡単な事しか出来ないけどごめんね」

郁美は救急箱を持って入って来た。それをちゃぶ台の上に置くと、慣れた手つきで蓋ふたを開けて、次々と薬品を取り出した。

「消毒してからガーゼ当てるね、右腕出してくれる？」

「お、おう」

修哉はぎこちなく返事をした後、右腕をちやぶ台に乗せた。力を入れると刺すような痛みが走り、修哉は気付かれない程度に顔をしかめた。

修哉自信はたいしたことないと言っていたが、その怪我は擦過傷の中でも重度と呼んでいい物だった。飛びながらカムナを抱えた後、頭からの落下を避ける為に、左に体を回転させたため、右腕から背中辺りまでの範囲の広い傷になってしまっている。また、着ていた服が薄手の半袖Tシャツだったことも怪我の悪化を手伝っていた。

「本当にごめんね……」

郁美は伏し目がちに言った。

「何度も謝るなよ。郁美だけが悪い訳じゃないんだから」

「でも……でもね……ごめん。やっぱりそれしか言えないや」

郁美の声は、涙声に聞こえるほど弱々しい物になっていた。修哉は、どうして気の利いた事が言えないのだろうと、一層自分を蔑んだ。

「じゃあ、じゃあさ……」

修哉が必死に言葉を選びながら、ゆっくりと言う。

「ありがとって言うてみるよ」

「……え？」

郁美が手を止めた、大きな瞳でほうけたように修哉を見上げる。

「だから、謝ってばかりじゃなくて、ありがとって感謝もしてみる。俺はカムナを助けた。その事に何度も謝られても、やっぱりこっちは気分が悪くなっちゃうだろ？ それならありがとって言った方が、俺も助けがいがあつたなって、そう思えるだろ」

発した言葉は、自分でも驚くほどに生意気で傲慢な、正論だった。郁美は衝撃を受けたように目を瞠って、すぐに俯いた。涙が出るのを必死に堪えている。そんなそぶりだった。

「お、おい。大丈夫か？」

「……うん。大丈夫だよ。駄目だね私。修哉君に迷惑かけてばっか

りだ」

郁美は処置を再開した。消毒薬をピンセットで取って、ぺたぺたと傷口を濡らしていく。そうする腕に力が入っていないくて、時々痛みがないか修哉に尋ねていた。

郁美は処置を終えたとおもむろに立ち上がった。

「替えのシャツ持ってくるね、お父さんが買ったやつで新品があるから」

そう言っつて畳部屋を出る郁美を、修哉は立ち上がって止める。

「そこまで気使わなくてもいいって」

「使わせてよ」

「いいから大丈夫だつて」

「嫌だ」

郁美はそう言っつて、強行的に押し問答を切り上げると二階へかけ上がった。

まさか嫌とは言われないと思っつていた修哉は、郁美の言葉に面食らつて、その場に立ち尽くした。その後、一つ溜息をつくとよろよろと畳部屋へ戻る。

ぼつつとしながら外で転げ回るカムナを見てみると、郁美が階段を駆け降りる音がした。

「はい！ 修哉くんにピッタリの爽やか夏男Ｔシャツ！」

振り返つた修哉に郁美が手渡したのは、水色地にデカデカと白で『夏男！』と書いてあるＴシャツだった。

「これを俺に着せるのか？」

「大丈夫。似合っつてるよ」

郁美はいたずらっぽいい笑みを浮かべた。それを見て修哉は盛大に溜息を吐いた。

門扉^{もんぴ}を開けて修哉と郁美が外に出ると、太陽は既^{すで}に地平線に姿を消していた。履きかけのランニングシューズをちゃんと履くと、修哉は郁美を見た。

「それじゃあな」

「うん。バイバイ」

修哉はゆつくりと歩を進めていく。そうすることに背中に郁美の視線を感じていた。

「修哉君！」

少し離れた所で郁美が修哉を呼んだ。修哉は立ち止まって郁美の方を振り返る。

「ありがとう！」

満面の笑みで郁美が言った。修哉も自然と笑みが零れる。

「おう！」

そう言っ、修哉は今度こそ力強く駆け出した。肌に纏わり付くジリジリとした空気が何故かしら気持ち良かった。

Scene . 3

空には、分厚い雲が途切れる端を知らずに浮かんでいる。明るいと
ころや暗いところなど、斑模様まだら模様のように明暗めいあんのある雲は、梅雨時
の長雨ながあめとは違って、素早く西方へと流れていく。

台風に埋められた空の下。燈野川東岸の土手に、修哉の姿があっ
た。修哉は土曜日のように、下はジャージ、上はTシャツというラフ
な格好で、階段に腰かけている。

あれから修哉はこの堤防でよく郁美と会うようになった。休日は
修哉が自主練を郁美と会えるような時間にずらし、平日は郁美が修
哉達の部活が終わる頃合いを見計らって散歩するようになった。

カムナは完全に修哉と祐樹を覚え、祐樹がテニス部から拝借した
ボールを使って毎日河川敷かせんじきで遊んでいた。

そして今日が四日目。今日も部活帰りに会えるのだろうと踏んで
いた修哉は、堤防に郁美の姿が無くて、啞然あぜんとした。

別に約束していた訳ではないので不自然な話ではないのだが、帰
ってからもどうしてか落ち着かなくて、堤防に出て来てしまった。

遠くから女子の声がした。反射的に修哉は振り向く。二高の制服
を着た郁美でない女子が、携帯で電話をしている。

それを見た修哉は、どうして郁美のアドレスなり番号なりを聞い
ておかなかったのだろうと後悔した。少なくとも修哉はもう郁美と
は気兼ね無く話きかしが出来るので、何度も機会を逸いっしていたのだと思
う。

郁美の家の電話番号なら調べは着くと思ったが、さすがにそこま
でする気はなれなくて、一つ溜息をつく、修哉は立ち上がって家
に帰ろうとした。

「おう兄ちゃん。最近よくイクちゃんを見掛けるなー」

修哉を呼び止めたのは肌の浅黒い初老男性おとこだった。半ズボンにポ
ロシャツ。野球帽をかぶり肩には金属バットとグローブがあった。

気付けば河川敷で野球をしていた熟年者集団じふねんしゅうだんは練習を終えたのか、用具を片付けて帰り始めていた。

「ええ、まあ」

修哉は失礼の無いように適度に肯定すると。その男性はにんまり笑った。

「控えめに言わんでええ、大分仲が良いだろ。イクちゃんは俺が定年で退職した三年くらい前にはここでよう散歩しとったけど、その頃から物静ものしずかなお嬢さんでな、まあ話しかけてみりゃ元気な子だで、ちよつとここいらのじじい共にはアイドルだったんやで」

「そうなんですか……」

「話しとると彼氏もないみたいで心配しとったけど、最近あんたらとよう見かけるようになってなー、仲間内でも話題になつとたわ」
男性は嬉しそうに話す。郁美の知らない一面を垣間かいま見ているようで修哉はなぜかもつと話が聞きたくなった。

「何で今日は郁美、いないんですか？」

「へへ、聞かれると思ったよ。どうせ兄ちゃん、さつきイクちゃんと会えなかったから来たんだろ」

あつさり言い当てられた修哉は恥ずかしくなって目を伏せた。

「なーに、心配はいらんよ。この時期になるとたまにこんな日があるしなー」

「この時期？」

「台風だよ。イクちゃん喘息持ちだろ？ 台風が近くなると喘息は悪化するんだ、これくらい知つとかなかんぞ、一高生さんよ」

「そうだったんですか……」

そう言いながらも、修哉は内心かなり心配していた。中学のときも、夏休み前に郁美が休みがちだったのを覚えている。学校にこれなくなるくらいということは、入院だとかそういうのではなくても、辛い事つらいは確かだ。

「台風が過ぎればすぐ良くなるもんだ。それにもうイクちゃん17だから軽くなつてるだろうし」

男性は終始笑顔を崩さずに言う。修哉はどうしていいのかわからず思案顔のままだった。

「そろそろ帰るな兄ちゃん、マイワイフが夜飯つくってまっとなるでよお」

へっへっへ、と低い声で笑うと、男性は踵を返して遊歩道を帰っていく。

「待つしかないか……」

修哉はその背中を見ながらため息を吐くように、小声で呟いた。

犬崎市立第二高等学校の美術室には、数名の生徒が夏の展覧会に向けて、蒸し暑さに苦心しながら絵筆を走らせていた。その美術室を出たすぐ向かいのトイレには、手を洗う郁美の姿があった。

蛇口を閉め、軽く咳き込むと、郁美は顔を上げた。美術室の窓からうねうねとうごめく台風が見えた。今夜にはこの地域に最接近し、明日の昼には雨が止むだろうとの予報が出ていたのを覚えている。

郁美は手をハンカチで拭きながらトイレを出ると、そこでばったり顔見知りに会った。

「あ、志保……」

「あれ！？ 郁美じゃん、何でいるの？ 今日台風だよ？」

郁美とは正反対の快活そうな女子が心配げに郁美を見た。郁美は出来るだけ元気に振るまおうと笑顔になった。

「夏の展覧会へ向けてスパートに入ってまーす」

「ああ……なんか構想が決まらないって嘆いてたね。それで、決まった？」

「うん。あとちょっとで完成かな。今回も風景画だけだね」

「ほんとに？ 見せて見せて、郁美は風景上手いもんね」

そう言う志保を連れて郁美は美術室に入った。

志保とは小学校からの仲だ。健康で、運動が出来て人望も厚い志保と、まったくそれに該当しない自分。小さい頃から何かと自分と

志保を比べてしまっけれど、志保はそんなこと全く気にせずに、性格も部活も違う郁美を受け入れてくれる。

「これだよ」

郁美は少し得意げにカンバスを見せた。それを見た志保は疑問符ぎもんぷを顔中に浮かべている。

「……郁美。毎度の事ながら綺麗だけど、これって……」

「うん、いいでしょ。我ながら結構自信作なんだよ？ これ」

郁美は笑顔で言った。志保も笑い返す。

「そっか。郁美がそう言うならこれで良いよ。じゃあ、私行くね。台風来てるし早く帰らなきゃ駄目だよ」

「うん、わかってる」

美術室を出て行く志保を見ながら、郁美は席に着いた。カンバスに向かうその表情には嬉しさと集中力が在って、絵筆を握るその腕には力が籠こもっていた。

Scene . 4

陸上大会の地区予選会場が二高に決まったことは、大会の始まる一ヶ月以上前から部内でも話題にされていた。

市立二高は、かねてから交通の便の良さや広い敷地などが注目されていて、何らかの大規模なイベントが行えないかと多くの打診^{だしん}があつたらしい。

しかし、男子が敬遠^{けいえん}されがちな女子校だった事が災い^{わざわ}して、それらの打診をことごとく断つてきた。

それも、三年前の共学化に伴って緩和^{かんわ}され、多くの屋外運動部が大会の開催校としてこぞつて推薦していた。

結局、女子陸上部が二高にも存在しているという理由で、陸上大会での使用が決定されたのだ。

さらに嬉しいことに、二次予選会場としても使われることが決まった。一高陸上部も団体での県大会出場の望みが大きくなり、部内の活気も程よく高まっている。

「どう修哉？ コンディションは」

放課後練習の時間。仮設テントの下で、ビニールシートに寝転び、お茶を飲む祐樹が言った。

「春大会辺りの状態には戻ってきてるよ、あとなんか一つ掴めないけどさ」

「駄目じゃんそれ。霧島部長、県大会しか見えてないんだぜ、リレーにも出るお前がそんなんじゃない、二次予選も危^{あや}うい」

「たかが会場が同じになっただくらいで夢見すぎなんだよ、強豪はどこに行ってもやっぱり強豪だ」

素っ気なく言った修哉に、祐樹は苦笑いした。

「まあ、夢見がちなのもわかるわな。チーム状況は、メンバーにしてもモチベーションにしても最近10年間の中では一番安定してんだろ？ いまだかつて一高陸上部の県大会出場はなしえていないん

だから、もし出場出来たらやっぱり嬉しいでしょ」

修哉は立ち上がったて伸びをした。背中の怪我が少しだけ痛む。台風一過の晴れの下今日は郁美は来るだろうか、修哉はそんなことを考える。

「わかってるよそんなことは。ただ、そうやって夢が少し近くなると、人間って誰しもそれを意識するようになるだろ。夢と自分の距離とかさ、そうすると逆に距離があるような気がしてしまって、萎えてくるんだ」

伸びを終えて深呼吸。伸びをしてまた深呼吸。それを何度か繰り返しているのと部室から霧島部長がやってきた。

「おい、朝倉と渡辺。明日大会出るメンバーだけで二高に下見行くから、それで無くなった時間を土曜で埋め合わせすることにした。午前練と合わせて午後も開けとけ」

「ええ！？先輩、祭は……」

部長の発言に祐樹が反駁すると、部長は鋭い目で祐樹を見た。

「大会二週間前だぞ？日曜の午後は練習は無しにしてやるから、それで我慢しろ」

「先輩！日曜の午前もあるんですか？」

「ああ。別にいいだろ」

「良くないですよ！」

「わーかった。祐樹、お前が今日1500で三分半切ったら無しにしてやる」

「無理ですよそんなの！オリンピック選手じゃないですか！」

「じゃあ諦めろ」

そう言って祐樹を一蹴すると、部長は踵を返してそそくさと戻っていく。

「ごめん修哉、お前と山田さんを一緒に祭に行かせるつもりだったのに……」

「絶対そんなつもりじゃなかったろ」

「えー、そこちょっとくらい信じてくれても良いじゃんか」

「お前の場合ナンパがしたいだけだろ」

「心外しんがいだなー、本当言うと高校入ってから一人もいないんだぞ」

「だからナンパしたいんだろ？」

「うぐ……」

祐樹が閉口へいこうすると、短距離走を取り纏まとめる三年の先輩が修哉を手招きした。どうやら練習を再開するらしい。

「練習再開するから行くな」

「へいへい、いつてらっしゃーい。俺も行かなきゃな、部長あおすじが青筋あおすじ浮かべて待つてる頃だ……」

半ば独り言のように祐樹が言くと、二人はそこで別れた。

その日の帰り道。祐樹は部内での先輩達の横暴おつぼうな振る舞いについて、散々小言こごんを修哉に聞かせると、堤防の所で、郁美の姿が見えないことに気付いた。

「山田さん今日もいないな」

「ああ、喘息らしいぞ。台風のせいで酷くなっただって」

「あれ？ 山田さん喘息持ちだったんだ」

祐樹も郁美が喘息持ちの事を知らなかったらしい。

「ちよつと心配だなあ。帰ってから志保しほにでも聞いてみるか」

「志保？」

耳慣みみなれない名前に、修哉は反射的に聞き返した。

「あれ、知らない？ 中学のときいたじゃん。山田さんといっつも

一緒にいた女子」

「……知らない」

「おいおい、どんだけ女子に疎うといんだ？」

修哉の発言に祐樹は苦笑いを浮かべる。

「とにかく志保とは仲いいからメールで聞いてみるよ」

「ん。なんかあったら教えてくれ」

修哉の言葉に若干間を開けた祐樹が不思議そうな目で修哉を見る。

「なんか、変わったな修哉……」

「何が？」

「なんだろう、なんか恋焦がれてる男子、って感じで、今までの修哉とは全然違うんだよ」

「そうか？ 俺は全然わかんないが」

「変わった変わった。異性に対して勇気が出て来たんだな」

「お前が言つとちよつと危ない発言に聞こえるぞそれ」

「心外だなそれは。俺は真剣に話してんだぞー」

「冗談冗談、悪い」

遊歩道にはいつもと変わらない人の姿がある。その中で個人個人は刻々と変わり続けている。そんな当たり前の変化に修哉は今気付いたような気がした。

踏み出せない自分は、心のどこかに閉まっておこつ。そして、今この時に踏み出せるだけ、変われるだけ、前に進んでみよう。

この数日間で郁美とあった出来事は修哉を限りなく前向きにしていた。ただ、まだ何も郁美に言い出せていない事に修哉はわだかまりを感じずにいらなかった。

金曜の放課後、部長が予定したとおりに一高陸上部は、顧問と顧問の車に乗り込んで、市立二高を目指した。

「400mと800mリレーのメンバーは、春大会と一緒だ。刈谷、中田、朝倉、市田。順番もこのまんまな」

車内で部長が出場者名簿を確認していく。今日はグラウンドを少し借りてリレーのバトン練習もする予定だった。

「おいおい、修哉。リレーメンバーの中で一人だけ二年じゃんか。出世したなー」

「三山がどうしても間に合わなかった。完治したのは一ヶ月前だが、

筋力も落ちてるし調子も最悪だった。名簿出す前日に自分から辞退したよ」

部長が春大会前に交通事故でレギュラーを離脱した先輩の名前を上げた。およそ三十名の部員を有する一高陸上部は三年生は短距離と投擲系、二年生は長距離と幅跳び、高飛びに選手が集中している。春先に先輩の事故があつて、当時幅跳び選手の中で一番100mの速かつた修哉が急遽リレーで走ることになり、そこで修哉が思わぬファイトを見せ、今に至っている。

修哉は自分が先輩を退けてしまったのではないかと一瞬負い目を感じていたが、県大会も見据えている今の状況ではやむなしと思うことにした。きっと三山先輩も県大会出場のために席を譲ったのだらう。

そう考えれば、修哉は自然とやる気に火をつけることが出来る。三山先輩の無念を自分の足で晴らしてやる。そう思うのだった。

「よし着いた。皆荷物持って中入れ。霧島、先に挨拶に行け」

顧問の先生が車を駐車場に停めて言った。部長が一番先に下りて校内に入っていく。祐樹と終夜は車の後方に回って先生から荷物を受け取った。祐樹は周りをいくつかビルが囲む、大きな校庭と校舎を見る。

「相変わらず大きい学校だよな」

「まあな、都市開発される以前からあるしな」

東門から中に入ると、校舎の全貌は一高とさほど差異は無かった。左手にグラウンド右手に校舎、さらにその右には体育館がある。ただグラウンドの大きさは一高とは比べ物にならなかった。単純に見積もっても一高の1.5倍はある。サッカーコートが一つ入って、さらに中くらいの観客席が設けられるほどの広さだ。

「おい、おまえら早く来い」

二高陸上部の顧問に挨拶を終えた部長が修哉達を呼んだ。副顧問に荷物を預けると、顧問と部員がグラウンドに入る。

「男子も増えたんだな」

祐樹が部長に気付かれないように修哉に耳打ちした。

「ああ、まあ三年にもなれば、こんなもんだろ」

共学なってから三年しか経っていない二高は、男子の数が全生徒数の三分の一弱とまだまだ少ない。二年前から設立されたと聞いている男子陸上部は全員で15人程度のあまり大きな部活とはいえないものだった。しかし女子と合わせると、40人は超えるので全体的には大きい。

「一高陸上部の皆さん二高にようこそ。部長の柏木かしわぎです。そっちにいるのが女子の部長の山寺やまでらです。今日はよろしくお願いします」
精悍せいかんな顔立ちの男子が言った。すぐ隣の女子も頭を下げる。

「こちらこそ。今日はよろしくお願いします」

霧島部長が粗相そそうの無いように言って、頭を下げた。部員達全員がそれに続く。

「よし、じゃあ一高の皆さんは荷物をまとめたらグラウンドに集まってくれ、準備運動をした後、それぞれの種目に分かれて合同練習だ」

サングラスを掛けた二高の顧問が、落ち着き払った声で言った。男女どちらの部活をもまとめる顧問は、厳しさの裏に優しさを兼ね備えた。そんな形容があてはまる、存在感のある顧問だった。

一同に集まっていた両校の陸上部は、二高顧問の一声で、それぞれの準備のためにグラウンドを散開さんかいしていった。

「予想通り、どの種目もおおむねこっちの勝ちだな」

校庭の端の花壇に腰を掛け、400mリレーの結果を聞いてプリントにメモした部長が満足げに言った。

「どの走者も0.5秒から1秒程度こっちの方が速いですね」
スプリットタイムを見た修哉が部長に話しかける。

「そうだな。この調子で行けば一次予選なら苦勞せずにいけるはず

だ。あとはバトンパスに磨きを掛ければ一秒は縮められるな」

部長は頷くと、力強く言った。

修哉はふと周りを見回すと、グラウンドの外から小走りで走って来る祐樹が見えた。

「部長。長距離の方も計測終わったんで、ちょっと休憩してきますね」

「タイムは？」

部長は抜きなく聞いた。祐樹は少々間の悪い顔を見ると、部長から目を逸らした。

「1500は4分17でした。他の奴は後で記録が来ると思います」

「おいおい、落ちたな」。練習不足が祟^{たた}ってるぞ。どうにか大会までに4分10は切れるようにしとかないな。休憩してもいいが、終わったらすぐ練習だ」

「はい」

あまり乗り気ではない返事をして、祐樹は部長との話を切り上げると、修哉のほうに近寄ってきた。

「修哉。トイレ行かね？」

「ああ？ 良いけどどこの？」

「校舎のに決まってるだろ」

言って、祐樹はそそくさと校舎のほうに駆けていく。修哉は戸惑いながらも祐樹に着いて行った。

人気の無い廊下に夕日が差し込むと、そこには寂寥と名の着いた、活発とか快気のような言葉とは対極に位置している、そんな雰囲気醸し出してしまふ。

昇降口から校舎の中に入った修哉と祐樹は、すぐ近くの男子便所の外で、少しの間時間を潰していた。

「なあ、ぶっちゃけ最近どうなのよ」

「主語をきちんと入れるように」

修哉は祐樹の質問をひとけりすると、校舎の中を見回した。窓には生徒会や部活関連の広告が張られている。その多くが大会の応援者を集めるための広告で、文化祭の有志企画の募集なども少なからず含まれている。

「だから、山田さんとだよ」

「別に進展があつたような無いような……」

はつきりと喋らない修哉に痺れを切らしたのか、座っていた祐樹は立ち上がって修哉に詰め寄る。

「悠長に言ってんなって！ 明日は燈野祭だろ？」

祐樹にしては珍しく声を荒げた。さすがに修哉も驚く

「祭っていたって、どうすりゃあ良いんだよ。誘うにしたって、理由とか……無いし」

「あー！ もう。お前は骨の髄まで奥手なのか！ 理由なんていらねえだろ！ 最近随分喋りやすくなってるし、燈野祭一緒に行かない？ って言えば済む話だ」

「そうは言っても、この場にいる訳じゃないし……」

かなりの剣幕で食って掛かる祐樹に、なんと行って良いのかわからず修哉は一層どもった。

「優柔不断もここまで来ると苛々するぞ、修哉」

少々怒気を孕ませた声で祐樹が言った。修哉はおっかなびっくり後ずさる

「ちよつとついて来い」

唐突にそう言って修哉の腕を掴むと、祐樹は強引に歩き出した。

「ちよつ！ おい、どこ行くんだよ」

「美術室。山田さん、美術部だよ」

場所を聞いて修哉は焦った。祐樹はわざわざ敵の本拠地に行こうとしているのだ。

「待て待て待て待て。ちよつと待て！！」

「待てるか！！」

祐樹は力と声で修哉を説き伏せると、修哉を引っ張り続ける。

勢いよく階段を上がって辿り着いたのは、二階の廊下の西端。閉められた扉には美術室と書かれた札がつけられていた。

「なんでまたわざわざ……」

修哉は諦念も半ばに溜息を吐いた。

「失礼します!!」

祐樹はそう言うのと扉を開けた。物音のしない廊下に、扉の横滑りする音が豪快に響いた。

祐樹と修哉は中に入る。修哉は教室内を見て、目を瞠った。

「誰も、いない？」

室内は無人で南側のカーテンがすべて閉められている。西側から差し込む減量した夕日が、室内を薄暗く照らし、西側の窓の前にはいくつかカンバスが立てられていた。

「これだな」

祐樹が手前から二つ目のカンバスの前に立った。修哉は祐樹がそれを選んだ意図が看破できなくて怪訝そうな顔をした。

「見てみるよ修哉、これ山田さんのだ」

祐樹に近づいて、修哉もそのカンバスを覗いた。

「これって……燈野川？」

全体的に淡いオレンジで彩られた画面は、一目で夕暮れ時を想起させた。やや右よりの場所に燈野川が滔々とその水を上方へと送り、燈野川の左側には河川敷と遊歩道が、そこを歩く人々や車と一緒に描かれていた。遠くには燈野大橋が見え、そこを行き交う車は画面左側、中層建築が立ち並ぶ東岸へと吸い込まれていく。

一つ一つの色が重なり合い、繋がりが合って生まれた一枚の絵。緻密に切り抜かれた風景は、美術に疎い修哉でさえも、言葉を失ってしまうほどの、美しさだった。

しかし、どうして郁美はこの場面を絵にしたのだろう。田舎でも都会でもない犬崎の、言ってしまうえばありきたりな風景をモチーフにするのは、修哉にはあまり良い選択とは思えなかった。

「修哉、普通なら犬崎の風景なんか描かないよな？」

祐樹はカンバスから目を逸らさずに言った。

「ああ」

「もしかして、もしかすると山田さんは……」

「違う。そんなんじゃない」

発言の内容を察した修哉が祐樹を止めた

「どうしてだよ？」

祐樹が修哉を見た。その表情は真剣そのものだった。

「そんなのは安易すぎる。俺達が再会したのは一週間前だ」

「台風の時期に堤防へ来なかったのは、絵を描いていたからかもしれないだろ？」

「そんなのはわかってる、ただ、認めたくないだけだ……」

修哉が静かに言った。祐樹はみるみる内に眉間に皺を寄せていく。

「訳わかんねえよ！！ いい加減にしろよ、修哉！！ 後ろを向いてるのも大概にしろ、時間は待ってちゃくれねえんだ！！ 伝えて来いよ！！」

「分かってるって言うてんだろ！！」

修哉はあらん限りの大声で祐樹に怒鳴った。度肝を抜かれた祐樹は途端に閉口する。

「こんな形で認めたくないから、自分から行くんだ」

静かなのに力強い、そんな声音だった。

「どうするんだよ」

「……郁美に会ってくる」

修哉は部屋から出るように扉へ歩くと、そこで立ち止まった。

「霧島部長に適当な理由つけて、言っといてくれ」

修哉は振り返らずに言った。

「……ああ。任せとけ」

祐樹はそれだけを言った。修哉はいつかの日の様に覚悟を決め、猛然と走り出す。

祐樹が美術室を出ると、廊下に志保が立っていた。祐樹は別段驚いた様子も見せず、志保を見る。

「居たのか……」

「まあね。本当に世話が焼けるなーって思ってたよ」

「婆さんみたいなこと言うなよ」

二人は苦笑いをした。祐樹は志保とは向かいの壁に座ると溜息を吐いた。

「あいつと付き合ってた中で、一番疲れたよ」

「そうだろうね。私もだよ」

「まあ、あとは太陽が沈む前にあいつが間に合うかどうかだな」

祐樹は窓を見上げた。陽はかなり傾いて、犬崎に夜が近づきつつあった。

「大丈夫だよ」

「……？　なんで？」

祐樹が解せない様子で聞く。すると志保は笑って答えた。

「あの子きつと今日は、待ってるから」

修哉は市街地を脇目も振らずに走っていた。校門を出た後で荷物を持っていないことに気付き、その後で祐樹が処理してくれるだろうと勝手に思い込んだ。

西の空に太陽の姿はもう無い、空の半分は夜が覆ってしまっている。

いつもより一時間以上も遅いこの時間では、郁美が堤防に居る可能性は限りなく低くなっていた。陽光が消えれば尚更で、過ぎていく時間に、落ちていく空の明かりに、修哉は焦燥を隠さずには居られなかった。

道行く人を掻き分けながら走り、迫るような暑さの空気を意に介

さず、信号が赤になれば止まることなく曲がった。自宅であるマンション近くを通り越し、建物の間を一心不乱に駆け抜ける。十字路で車と居合わせクラクションを鳴らされても、一瞬立ち止まって頭を下げたら、運転手の顔も見ずに走り去った。

遠くに、小高い堤防が見えた。

階段を三段飛ばしで駆け上がる。危なげに道路を渡ると遊歩道へ転げ落ちるように駆け下りた。失速できずにたたらを踏んで踏みとどまると遙か南に見える大橋へ向かって遮二無二走る。そして、彼女を見つけた。

いつもと同じ階段で、いつもと同じ姿勢のままで、いつもと同じ少し寂しげな表情を浮かべながら、郁美は、祭りの準備に明け暮れる燈野川を見つめていた。

「……大丈夫？」

郁美は立ち上がって心配そうに修哉を見た。修哉は膝に手をついて、必死に息を喘いでいる。

濁流のように流れ出る汗が地面に落ちて、すぐさま乾く。止まることのない鼓動が、修哉の意識をどうにかここに繋ぎ止めているようだった。

「……郁美」

「うん？ 何？」

郁美は一層修哉に寄り添った。修哉の顔に自分の顔を近づけ、咳くように出される修哉の声に耳をそば立てた。

「燈野祭りに……、一緒に……、行って欲しいんだ」

「どうしたの？ 急に」

修哉は顔を上げた。玉のような汗を袖で拭う。乱れる息を何とか整えると郁美の大きな瞳を見つめる。

「俺と一緒に……、燈野祭に行こう」

郁美はおかしそうな笑みをこぼす。修哉は自分が何を言っているのか分からなくなった。意識が朦朧とする中、自分は考えていたことを伝えられているだろうか、変な事を言っていないだろうか、そ

んな不安にかられた。

そんな修哉を郁美は見上げる。混じりけのない純粹な、満面の笑みで、言った。

「うん！」

太陽は西の空に沈みきっている。僅^{わず}かに残っていた空の明かりが、今、消えた気がした。

Scene . 5

金曜の練習を無断早退した修哉は、土曜日、帳尻合わせだと豪語する極悪非道部長の命令で、朝から晩まで延々と走らされた。

その後の帰り道、部活中は平静を保っていた祐樹が、突然「どうなった？」だとか「やっちまったか？」だとか「青春だなー」とか、そんな言葉を連呼して、修哉を質問責めにした。

無愛想に「何にもない」とだけ言い通して、その詰問を切り抜けると、修哉はマンションに着いていた。

昨日、郁美には部活で間に合わないと言っておいたので、堤防で彼女を見掛けることはなかったが、いつぞやのように、どうにも修哉は落ち着かなかった。

郁美に聞いた電話番号を幾度となく見て、何も話すことが無いのに気付き、携帯を閉じる。その繰り返し。

そう。自分は祭へ一緒に行く事を約束しただけで、恋人同士なんかではないのだ。

修哉は、再び携帯の電話帳を開いて郁美の番号をまじまじと見つめると、ため息を一つ吐いて、携帯を閉じ、机の上にそつと置いた。修哉は部屋の電気を消すと、ベッドに仰向けに倒れる。

ここ数日で怒涛の更衣ラッシュに見舞われた朝倉家は、敷布団や掛け布団も夏のそれに変わっている。忘れかけていた、でも何度も触れたことのある感触が修哉を包んだ。

いつもとかわらない夜空の姿が見える。一面の黒。ちりばめられた無数の光点。穏やかに吹く夜風。近くで泣いた虫の音と遠くで聞こえた森のざわめき。

心を空にしても受け切れないほどの、無数の要素が体に飛び込んで来るような、そんな感覚。

「夏か……」

どうせ今年も、例年と変わらない部活漬けの毎日だろう。それで

も少し、ほんの少しだけ違う気がした。

星空に帯のように一際明るい一部分。

あと二日で、彦星^{ひこぼし}は川を渡り終わるのだろう。愛する人に会える、そんな希望で心を満たして。修哉もそれに似たような、同じような充足感を感じていた。織り姫と彦星のように、大きくも美しくもないけれど、二人の心は限りなく近い場所にある。修哉は素直な気持ちで、そう考える事が出来た。

唐突に携帯の呼び出し音が鳴り響いた。

修哉は跳び起きる。手を伸ばして携帯を取ると、サブディスプレイには山田郁美の文字。

修哉は急いで開けて通話ボタンを押した。

『もしもしー』

優しくて、愛らしくて、どこか間の抜けたそんな声が聞こえて、修哉はなぜか安心した。

『かけちゃった』

修哉は携帯をもったまま再度ベッドに寝転んだ。

『何だよそれ、なんか掛けたくなかったみたいな発言だな』

『そんなことないよ。なんか最近ゆつくり会ってなくてさ、落ち着かなかったんだ。なんか今夜は喋っておきたいな』と思って』

郁美も自分と同じように考えている事に修哉は驚いた。一方的ではなくなっている。そう感じた。

『ねえ修哉君……』

郁美が君付けで呼ぶと、修哉は何故か煩わし^{わづい}さを感じた。

『君^{くん}なんか付けずに修哉で良いよ』

『え?』

『俺も郁美って呼んでるだろ? だから郁美も修哉って呼んでみなよ』

『でも……』

恥^はじらいがあるのか、郁美は押し黙る。

『ほら。修哉って呼んでみ』

数秒の沈黙が続く。

『……修哉』

その言葉に修哉は笑顔になった。

「そうそう、もう他人じゃないんだし、それで良いじゃん」

『……うん』

郁美はか細い声で呟いた。

「それで、何？」

『……え？』

郁美は、ほうけたように言った。

「何か言いたかったんじゃないのか……？」

『……あー。もう修哉が変な事言うから話しづらくなっちゃったよ』

「そう？ ごめん」

『うーん……。じゃあ謝る変わりにあれ着て来てよ』

「あれって？」

『えー。覚えてないの？』

修哉は黙考する。心当たり**（もっこう）**にぶつかってそれが何かを冷静に判断すると、身震いがした。

「……待てよ。まさかお前……」

『そのまさかだよ。頑張れ夏男！』

修哉は部屋を見回した。隅**（すみ）**にあるソファの上にきちんとたたんで置いてあるのは、あの日郁美に貰**（もら）**った水色のTシャツ。

「嫌だつて言つて良いですか……」

『拒否します』

「お前には羞恥心という物が無いのか……」

『とにかく着て来てね。六時に家で待つてるから』

「善処**（ぜんしよ）**します……」

『それでよろしい。じゃあね』

「……わかった。迎え行くよ」

そう言つて二人は電話を切った。修哉は嬉しいのか悲しいのかわからない、そんな複雑な心情のまま、床に着いた。

郁美に言われたとおり、修哉は夏男Ｔシャツを着て、財布と携帯を確認すると、扉を開けて外に出た。

郁美と共に居る時間はどうしてこうも夕暮れ時が多いのだろう。修哉はマンションの階段を下りながら、遠くに見える夕日を見て思った。夜の様に寡黙^{かもく}な自分と昼のように明るく快活な郁美には、ちょうど中間の夕焼けが似合うのだろうか。

修哉はのんびりと道路を歩いていく。余裕を持って家を出た分、郁美の家まで物思いにふけりながら歩を進める。昨晚も聞こえていた祭りの喧騒が、次第に大きく活気付いた物となっていた。

修哉は、郁美の家に着いた。

八日前。自分はここで背中に大きな怪我を負いながら、郁美の泣きを見ていた。それまでは女性に対してなんとなく可愛いとか、綺麗というような意識しかもっていなかったのに、その泣きを見て、修哉は初めて女性の事を愛らしいと思った。

修哉は、ためらうことなく呼び鈴を鳴らす。家の中で輕妙^{けいみょう}な音色が流れた。

思えばこの１０日間、本当にたくさんの事があった。全く交わることのなかった二人が、偶然に偶然を重ねて、こんな風に気兼ねなく出会えているのだから、修哉は驚かずにはいられなかった。

玄関の引き戸が少しだけ開く。その隙間から、郁美が顔を出した。「あ、修哉！　ちよつと待っててね」

一度中に戻り、家族に行ってきたと声を掛けた後、すぐに郁美は外に出てきた。小走りで門へと近づき、修哉へ寄り添う。

「お待たせー」

郁美は修哉を見てはにかんだ。修哉は郁美の浴衣姿に、思わず目を奪われてしまっていた。長髪をポニーテールに束ね、水色の浴衣を羽織る郁美は、誰が見ても可愛らしかった。

「いこっか」

「お、おう」

修哉は郁美の声に慌てて返事をする、堤防へ向かって歩き出した。

「着て来てくれたんだね」

「……え？」

「そのＴシャツだよ」

「ああ、まあな」

「ありがと。この浴衣と色がお揃いでしょ？　だから着てきて欲しかったんだ」

郁美が嬉しそうに言う。いまさら気付いた修哉は、心底感心していた。

「そついう意味だったのか」

「当たり前だよ」

郁美は修哉の数歩前を歩いていく。ひらひらと風になびく浴衣の袖が、可愛らしかった。

「でも、わざわざ夏男にしくなくても……」

「まあそれは、しょうがないね。男子が着れる水色のＴシャツが家になかったんだもん」

「じゃあ、今度買いに行こう」

「ホントに？　行く行く！」

二人の笑い声が道に響く。沈みかけた陽は、暗澹あんたんとか陰鬱いんうつのような暗い感情ではなくて、明日への希望のような明るい感情を湛たたえていた。

祭り会場は人でごった返していた。

東岸と西岸では、その様子に大きな差異はなく、延々と続く屋台の群れと、たびたび見かける休憩場や特別企画のスペース以外は、一点して売りに徹しているらしかった。

修哉は郁美と屋台の群れを見て回る。二人とも小さい頃から祭りには参加しているので、同じような話題で盛り上がった。

焼きそば、みたらし、りんご飴、チョコバナナ、ポップコーン。祭り特有の甘い香りと、太鼓の音色、人の波。今まで毎年のように見ていた景色、犬崎市民にとって夏の始まりとも言える燈野祭りが、今の修哉にはまるで違っていた。

笑う郁美、頷く修哉。流れていく時間が愛おしくて、修哉はこんな時間がずっと続いて欲しいと本気で思っていた。

「なあ、郁美」

何度も郁美と会ったあの階段で、修哉は隣に座る郁美を見る。

「うん？」

綿菓子最後の一欠けらを食べた郁美が修哉を見返した。

「どうしても、見せたいものがあるんだ」

「何？」

怪訝そうな表情で郁美は修哉を見る。

「着いてきてくれるか？」

修哉の質問に郁美は笑った。

「もちろん」

郁美の即答に安堵した修哉は、立ち上がり郁美の手を握った。同時に郁美も立ち上がる。階段を登って、遊歩道を歩く人波を掻き分けながら、修哉は燈野大橋を目指した。

その間二人は終始無言だった。郁美にも修哉が見せようとしているものが分かっていて、だからこそ嬉しかった。

犬崎に住む者なら誰もが夢見る、あの場所へと二人は歩を進める。大橋へたどり着いて、さらに多くなった人垣を分け入るように進み、橋の中頃にまでたどり着いた。

そして修哉は瞳を閉じた。

ただ、その時を待ち続けた。

燈野川とうのがわの上流から、無数の燈籠とうろうが流れている。緩やかに、そして穏やかに流れ来る数多あまたの灯は、黒々とねる川面かわもをその光で満たしていく。

燈野川はその姿を変えようとしていた。

織り姫と彦星が一年の時を経て夜空で巡り会うこの夜に、燈野は幾千もの燈籠と共に大地に光溢あふる大河を作り出す。

人の営いとなみを忘れるほどの静寂と暗闇と輝きの中。燈野を横断する橋の上で、二人は手を握りあっていた。

目の前を流れる圧倒的な自然の芸術に吞のまれてしまいそうで、無意識に、互いの手を握りあっていた。

気付けばもう、燈籠の群れは大橋を越え、視界に入る燈野の川面、その全てを埋め尽くそうとしている。

「……郁美」

聞き逃してしまいそうなほどに、小さくて力のある声で、修哉は言った。

「……」

郁美は何も言わなかった。何も言えなかった。数秒とも永遠とも感じられる沈黙の時を、山林のざわめきがとりつなぐように小玉する。

「ずっと前から、郁美を見てた。郁美のことが好きだった、だから……」

言葉を紡ぐことが、こんなにも難しいのかと修哉は焦った。でももう止まろうとは思わなかった。

「これからもずっと、郁美の側で、郁美の隣で……」
握る拳が強くなる。胸を打つ鼓動が早くなる。咄嗟とつさに修哉は郁美

を見た。郁美も同じように修哉を見ていた。自分を見つめる瞳に修哉は思考が吹き飛びそうになる。

そして、込めるように言う。

「これからずっと、郁美の隣で、郁美のことを好きでいさせてほしい」

初夏の夜を涼んだ風が駆け抜ける。それは二人を包み、その思いを、その意識を、遥かなる天へと舞い上げる。

永遠の静寂と深遠の漆黒。その中で、大地に象られた天の川の灯が、巡り会った二人の掌をいつまでも、いつまでも繋ぎ留めていた。二人の夏は、まだ始まったばかりだ。

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6006e/>

七月の河

2010年10月8日15時42分発行